

鞠智城と菊池川中流域の地域社会との関係解明を目的とした 考古学的研究論文要旨

柴田 亮

本論は、鞠智城と菊池川中流域に所在する遺跡を考古学的手法によって分析することで、9世紀後半から10世紀の地域社会と鞠智城の関係性について論ずるものである。

鞠智城の考古学的な画期のうち、Ⅳ期(8世紀第4四半期～9世紀第2四半期)とⅤ期(9世紀第3四半期～10世紀第3四半期)は鞠智城が倉庫として使用された段階に該当する。菊池川中流域では、8世紀後半頃に集落が急増するが、9世紀前半までにその多くが消滅する。一方、御宇田遺跡群や赤星水溜遺跡など9世紀後半まで存続する遺跡がわずかに存在しており、これらの遺跡からは、特殊な建物配置や墨書土器、初期貿易陶磁器が見つかるなど、官衙や地域内有力者に関連する遺跡であることが想定される。9世紀前半と9世紀後半の時期の境は、鞠智城がⅣ期からⅤ期に移行する期間とおおむね合致していることから、鞠智城Ⅳ期からⅤ期への変化と、菊池川中流域の官衙や地域内有力者の関連遺跡の消長が連動することが予測される。このような視点から、山鹿郡御宇田遺跡群と菊池郡赤星福土・水溜遺跡の考古学的分析を中心に、菊池川中流域の古代集落の動態を鞠智城と比較することで、鞠智城の倉庫群の歴史的評価を試みた。

分析の結果、御宇田遺跡群や赤星水溜遺跡は概ね9世紀後半が主体であり、土器型式などは鞠智城と類似することを確認した。菊池川中流域の9世紀後半頃の遺跡には、御宇田遺跡群のようなコの字型の建物配置を有しているものが含まれている。この時期は肥後で公営田が設置された時期に相当することから、公営田関係者の遺構となる解釈が可能となる。また、鞠智城Ⅴ期の倉庫群は菊池川中流域の公営田関係者が利用した可能性が高いと結論づけた。

菊池川中流域の古代集落の動態は、鞠智城の倉庫群の変遷と有機的に結びついており、これは倉庫群や菊池川中流域が律令制度に基づく国家的な開発事業のもとで成立したことが要因である。律令制度の変容・崩壊とともに鞠智城は廃絶に至ったのである。

「鞠智城と菊池川中流域の地域社会との関係解明を目的とした考古学的研究」 発表要旨

柴田 亮

1. 本研究の目的

9世紀後半代から10世紀における菊池川中流域の古代集落の消長と鞠智城との関係性、その社会的背景について明らかにすること。

2. 分析方法と分析対象

(1) 分析方法

9世紀後半頃の集落遺跡を対象として、遺物の悉皆調査を実施。土器の器種組成や遺跡の存続幅を把握後、両遺跡の分析結果を鞠智城の土器分析データと比較。鞠智城と両遺跡の並行関係と出土遺物の共通点と相違点を検証。

〈土師器・須恵器の年代観〉網田 1994a・b、山元 2019
〈貿易陶磁の年代観〉山本編 2000

— 準拠

(2) 分析の対象

a. 御宇田遺跡群(図1)

山鹿郡内菊池川右岸の丘陵上に位置。調査区:妙見I・II地区・虎ヶ迫地区・西久保地区に分けられ、妙見II地区・虎ヶ迫地区のみ遺構配置図あり(野田 1998)。

〈虎ヶ迫地区〉掘立柱建物、竪穴建物群、柵列など

〈妙見II地区〉コの字形の建物配置をもつ掘立柱建物群、土坑など



b. 赤星福土・水溜遺跡(図1)

菊池郡内、菊池川南岸に発達した扇状地上に位置。福土地区と水溜地区に分けられる(熊本県教委編 1977)。

〈福土地区〉方形土坑群、柱穴、溝

〈水溜地区〉竪穴建物、柱穴、溝

図1 遺跡分布図(能登原 2014 を改変)

3. 分析結果

(1) 御宇田遺跡群

〈虎ヶ迫地区〉8世紀中頃～10世紀前半までの時期幅であり、主体は8世紀後半頃～9世紀前半。墨書土器あり。

〈妙見Ⅱ区〉8世紀後半～10世紀前葉までの時期幅であり、主体は9世紀後半頃。9世紀後半～10世紀前葉:墨書土器が13点出土した92土坑、墨書土器2点と越州窯系青磁Ⅰ類が出土したSK04などがある。遺物数は少ないが、緑釉陶器や円面硯も認められる。

(2) 赤星福土・水溜遺跡

〈福土・水溜地区〉8世紀後半～9世紀の時期幅。土師器碗・坏(回転台・手持ちヘラケズリ)、荒尾・宇城産須恵器など。墨書土器や越州窯系青磁(Ⅰ・Ⅱ類)もあり。

(3) 鞠智城の出土遺物との比較

【鞠智城の土器型式】御宇田遺跡群、赤星福土・水溜遺跡と大きな違いは見出せない。

【土器組成】土師器主体・供膳具主体は鞠智城と一致。御宇田遺跡群、赤星福土・水溜遺跡は土師器の甑・甕が一定数出土しており、鞠智城と相違点あり。

【時期別の変遷過程】御宇田遺跡群:10世紀前葉まで遺物が確認されており、鞠智城Ⅳ・Ⅴ期変遷過程と概ね一致。赤星福土・水溜遺跡:鞠智城Ⅴ期まで存続しているが、その下限は9世紀後半。

4. 考 察

(1) 鞠智城Ⅳ・Ⅴ期における鞠智城の評価

近年の研究では、能登原孝道2014・向井一雄2014・里館翔大2018・垣中健志2021・岡田有矢2021・藤井貴之2023などがある。

菊池川中流域の開発と生産力向上を背景に、大宰府や国府が成立に関与し、維持・管理についても国家が関わったと指摘する意見が多い。一方、鞠智城周辺の集落との関係性の強さを重視する意見もあり。

(2) 9世紀代の菊池川中流域の地方行政

特徴的な政策として〈公営田制〉が挙げられる。

〈公営田制〉財政の危機を克服し歳入を確保する目的で案出された国家経営の田制。弘仁14年(823):大宰大貳小野岑守の建議に基づき、大宰府管内九国における口分田の中から良田を割取して設置。肥後国は嘉祥3年(850)、斉衡2年(855)に営田の継続が申請され、許可。肥後で成功を納め、貞観年間(859～877)まで継続(工藤1997)。

5. 結 論

菊池川中流域に8世紀後半頃に出現する遺跡:律令制に基づく国家的な農地開発事業を背景に成立。多くは9世紀前半までに消滅。

9世紀後半以降の集落:コの字型の建物配置を有する御宇田遺跡群や上鶴頭遺跡(熊本県教委編1983)があり、貿易陶磁や墨書土器といった特殊な遺物が出土する傾向。

コの字型の建物配置を有する遺跡の評価:延暦14年(795)院倉分置の格の発布により設置された郡倉の別院と指摘(工藤1983・1997、板楠1988など)。

両遺跡の主要な年代:9世紀後半頃 → 倉分置の格の発布と約50年の開き

9世紀後半は公営田が設置された時期に該当。菊池川中流域の遺跡にコの字型の建物配置が出現する時期と概ね合致。



御宇田遺跡群や上鶴頭遺跡:公営田の設置に伴い出現した公営田関係者の遺跡とする解釈が可能。赤星福土・水溜遺跡の調査地点ではコの字型の建物配置が確認されていないが、公営田の耕作に携わる庶民の居住域と想定される。

鞠智城V期の倉庫群:菊池川中流域に設置された公営田の関係者が利用した倉庫と想定

9世紀末に受領制が成立し、10世紀代に富豪之輩と呼ばれた地方の有力者に徴税を請負わせる負名体制が成立すると(佐々木2004)、公営田による税収の必要性が減じたことで、公営田経営に関連する集落は自然に消滅。鞠智城の倉庫群も役割を終えたと考えられる。

【参考文献】

- 網田龍生1994a「奈良時代 肥後の土器」『先史・考古学論究』197-254頁 龍田考古会
- 網田龍生1994b「肥後における回転台土師器の成立と展開」『中近世土器の基礎研究』X 93-117頁 日本中世土器研究会
- 板楠和子1988「記録と伝承」『古代熊本の風土と地名』32-36頁 全国地名シンポジウム熊本大会実行委員会
- 岡田有矢2021「出土遺物からみた平安時代肥後国内における鞠智城の位置付け」『鞠智城と古代社会』第10号1-24頁 熊本県教育委員会
- 垣中健志2021「地域社会からみた鞠智城—八世紀から十世紀を中心に—」『鞠智城と古代社会』第10号25-44頁 熊本県教育委員会
- 熊本県教育委員会編 1977『赤星福土・水溜遺跡』
- 熊本県教育委員会編 1983『上鶴頭遺跡』
- 熊本県教育委員会編 2012『鞠智城跡Ⅱ—鞠智城跡8～32次調査報告—』
- 工藤敬一1983「上鶴頭遺跡の性格についての一推論」『上鶴頭遺跡』85-86頁 熊本県教育委員会
- 工藤敬一1997「古代的世界の解体」『図説 熊本県の歴史』7-174頁 河出書房新書
- 佐々木恵介二 2004『受領と地方社会』山川出版社
- 里舘翔太2018「平安時代の鞠智城周辺の国内情勢」『鞠智城と古代社会』第7号 23-42頁 熊本県教育委員会
- 能登原孝道2014「菊池川中流域の古代集落と鞠智城」『鞠智城跡Ⅱ 一論考編1—』121-139頁 熊本県教育委員会
- 藤井貴之2023「九世紀における鞠智城倉庫群の基礎的考察」『鞠智城と古代社会』第11号 44-69頁 熊本県教育委員会
- 松本寿三郎・板楠和子・工藤敬一・猪飼隆明 2012「二章 律令国家の成立と展開」『熊本県の歴史』30-72頁 図書印刷株式会社

向井一雄2014「鞠智城の変遷」『鞠智城跡Ⅱ—論考編 2—』75-105頁 熊本県教育委員会
 山本信夫編2000『太宰府条坊跡XV—陶磁器分類編—』太宰府市教育委員会
 山元瞭平2019「古代宇城窯跡群の基礎的研究—須恵器編年を中心に—」『先史学・考古学論究』Ⅶ 219-231頁龍田考古会

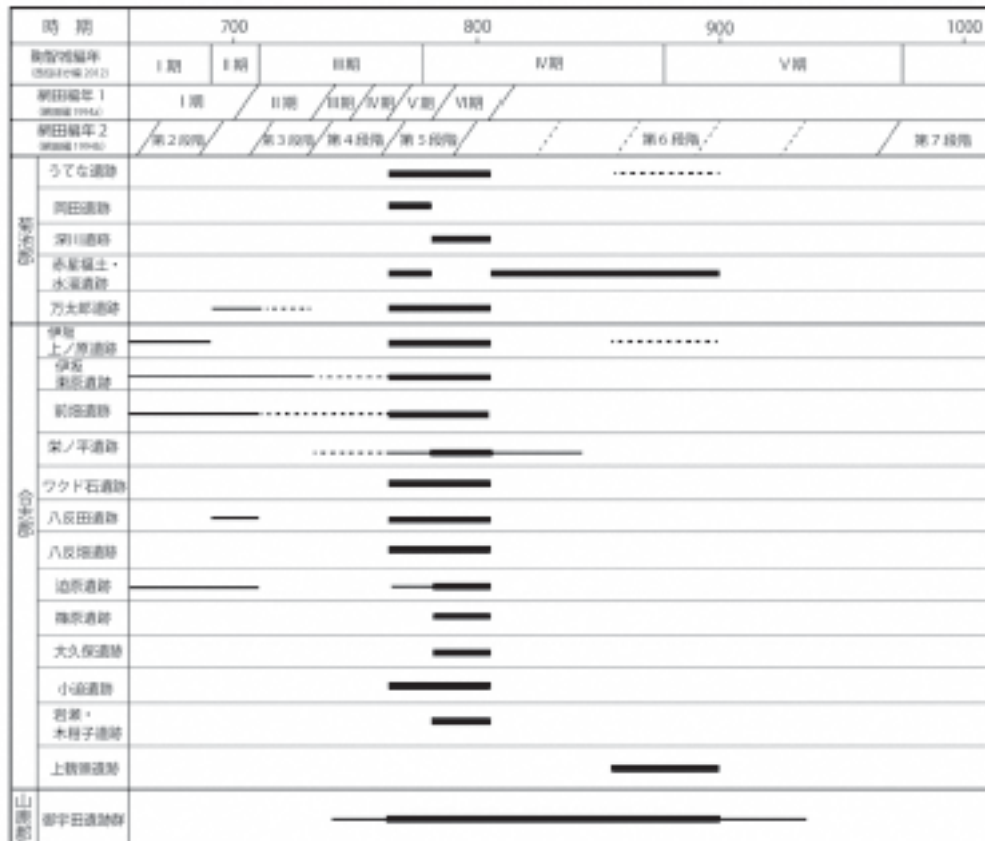


図2 菊池川中流域の古代集落の時期別消長（能登原 2014 掲載図をもとに筆者作成）